

角野栄子『トンネルの森1945』論—戦時下の子どもを取り巻く状況— 台湾・中華大学 王 盈文(オウ・エイブン)

テキストと受賞歴

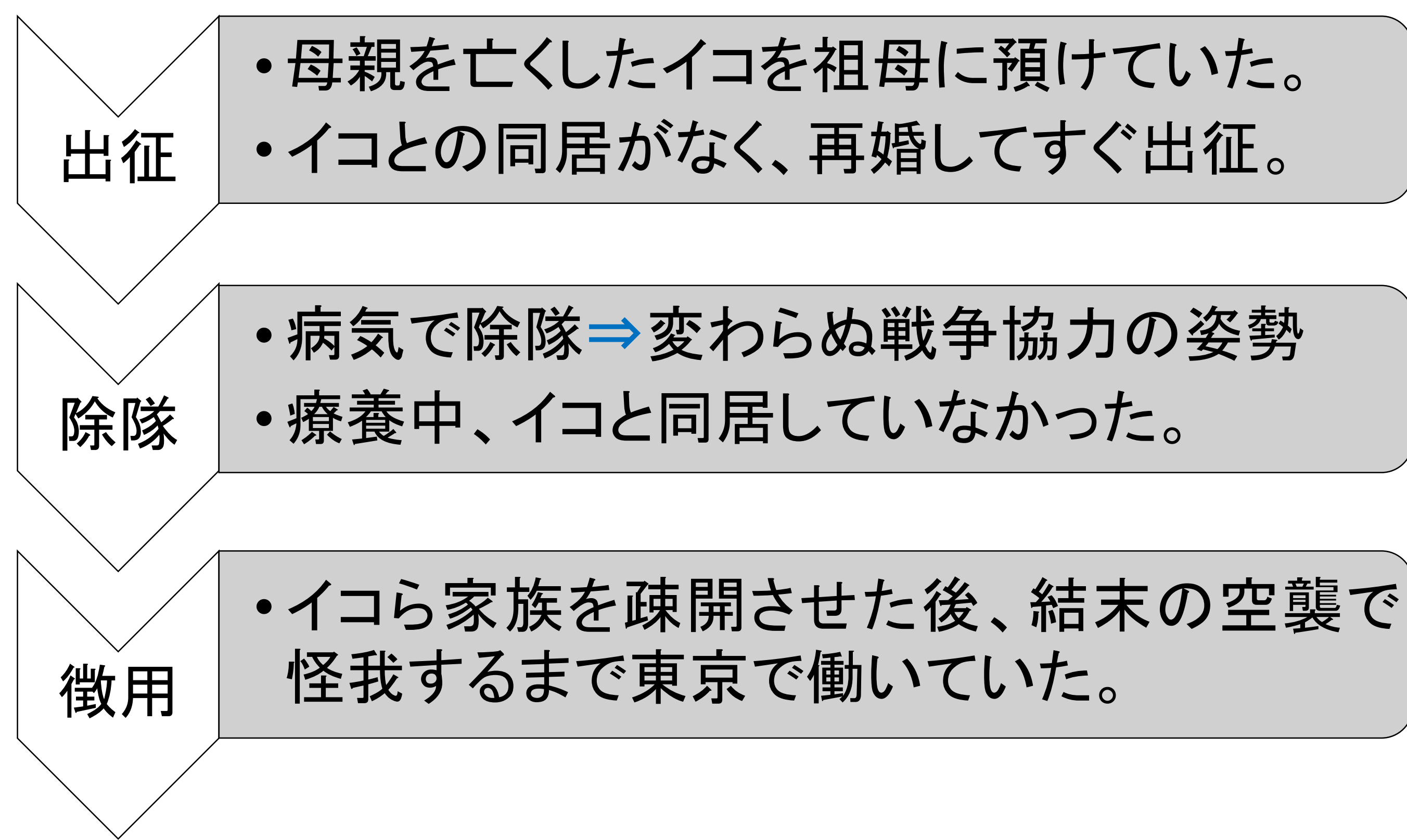
- 角野栄子『トンネルの森1945』角川書店、2015年
- 2016年第63回産経児童出版文化賞のニッポン放送賞受賞

著者のインタビュー等

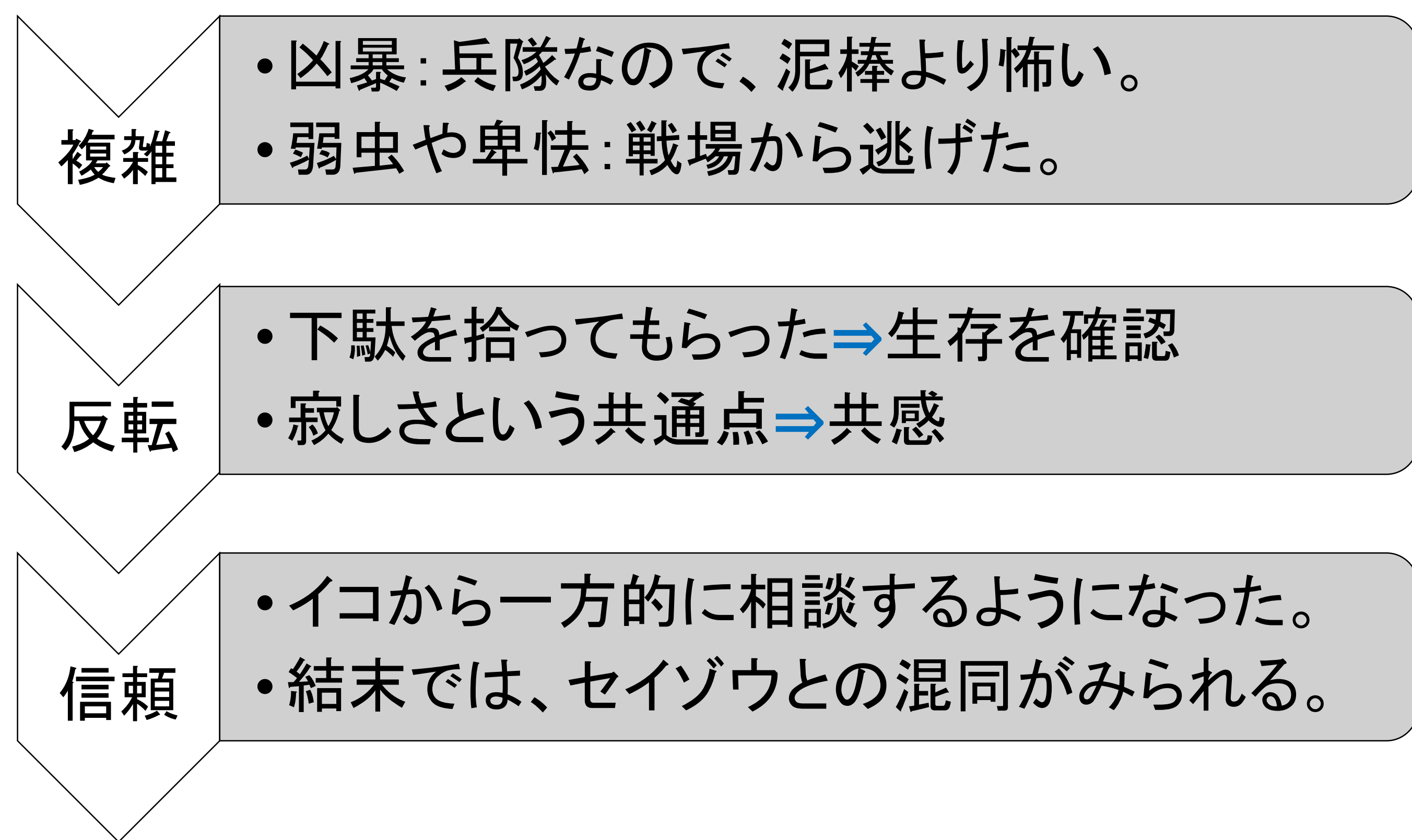
- 自身の戦争体験を振り返ったもの。
- 歴史認識や大人の考えより子供の観点を重視。

長期不在の父親・セイゾウ

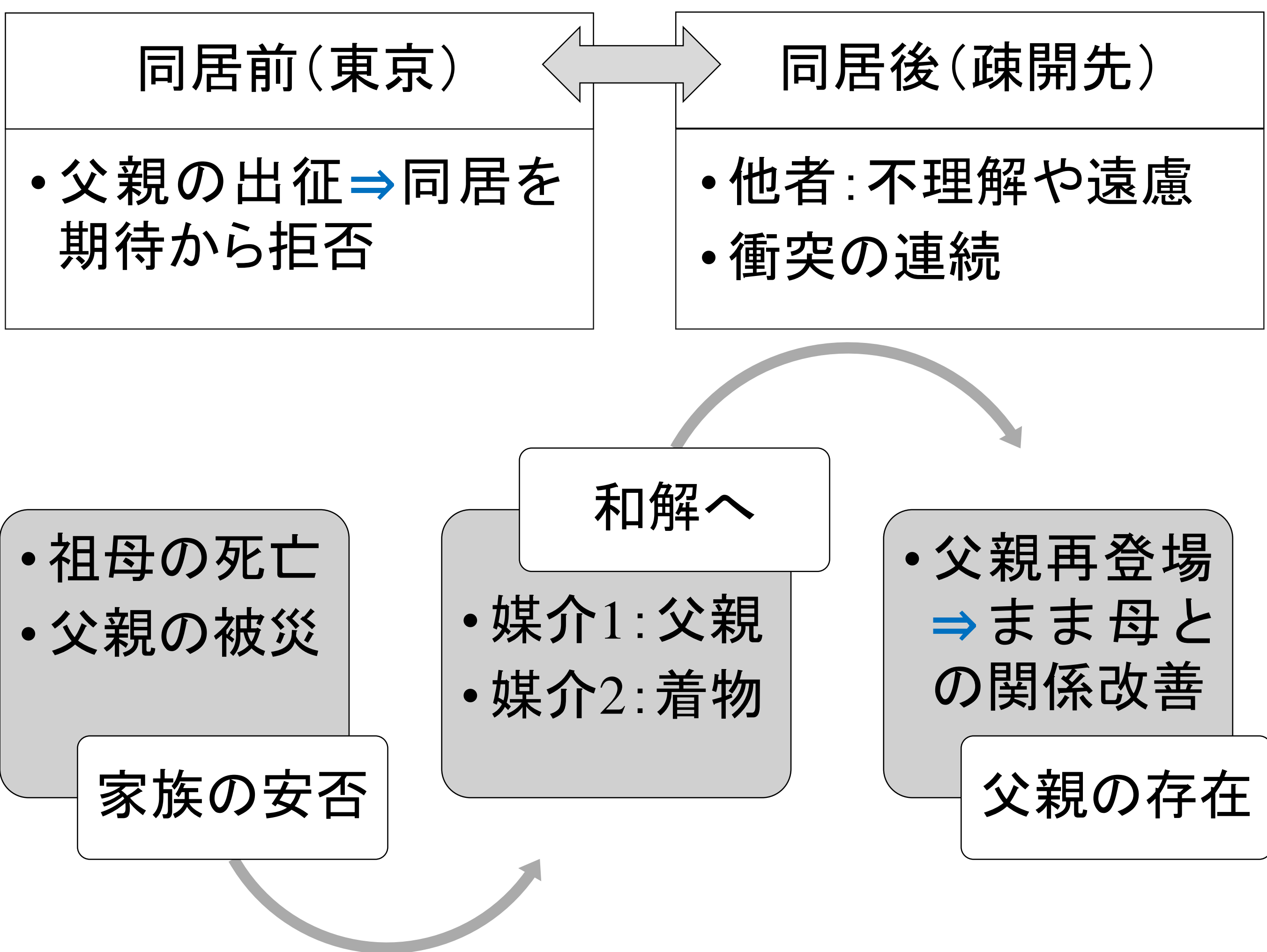
- 母親のいないイコは父親に厚い信頼を寄せている。
⇒父親・セイゾウの登場は少なかった。
- セイゾウは国の指示に従い、天皇に敬意を表している。⇒戦時下の理想的な国民



森のなかの脱走兵

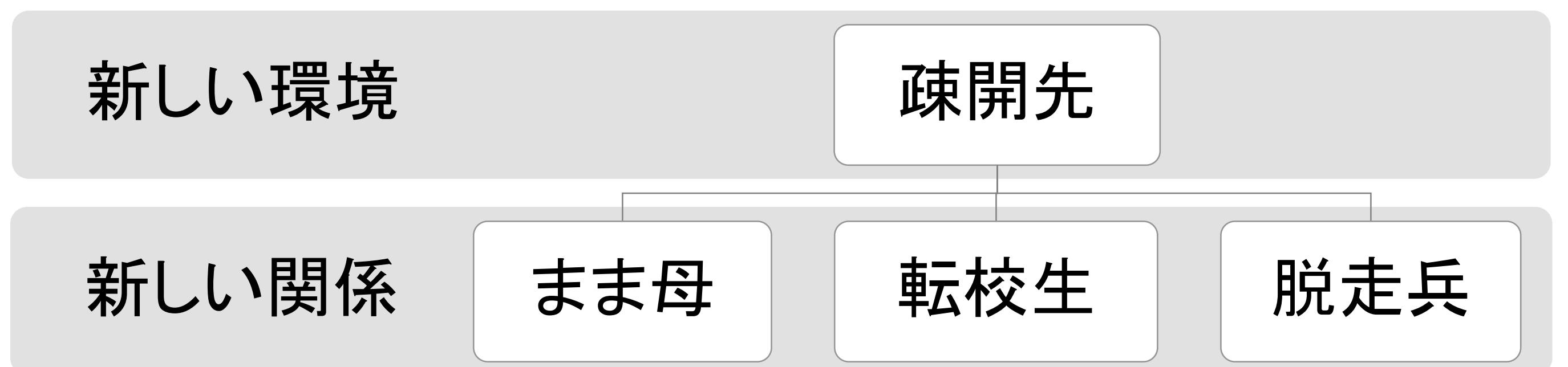


ママ母との関係



問題意識

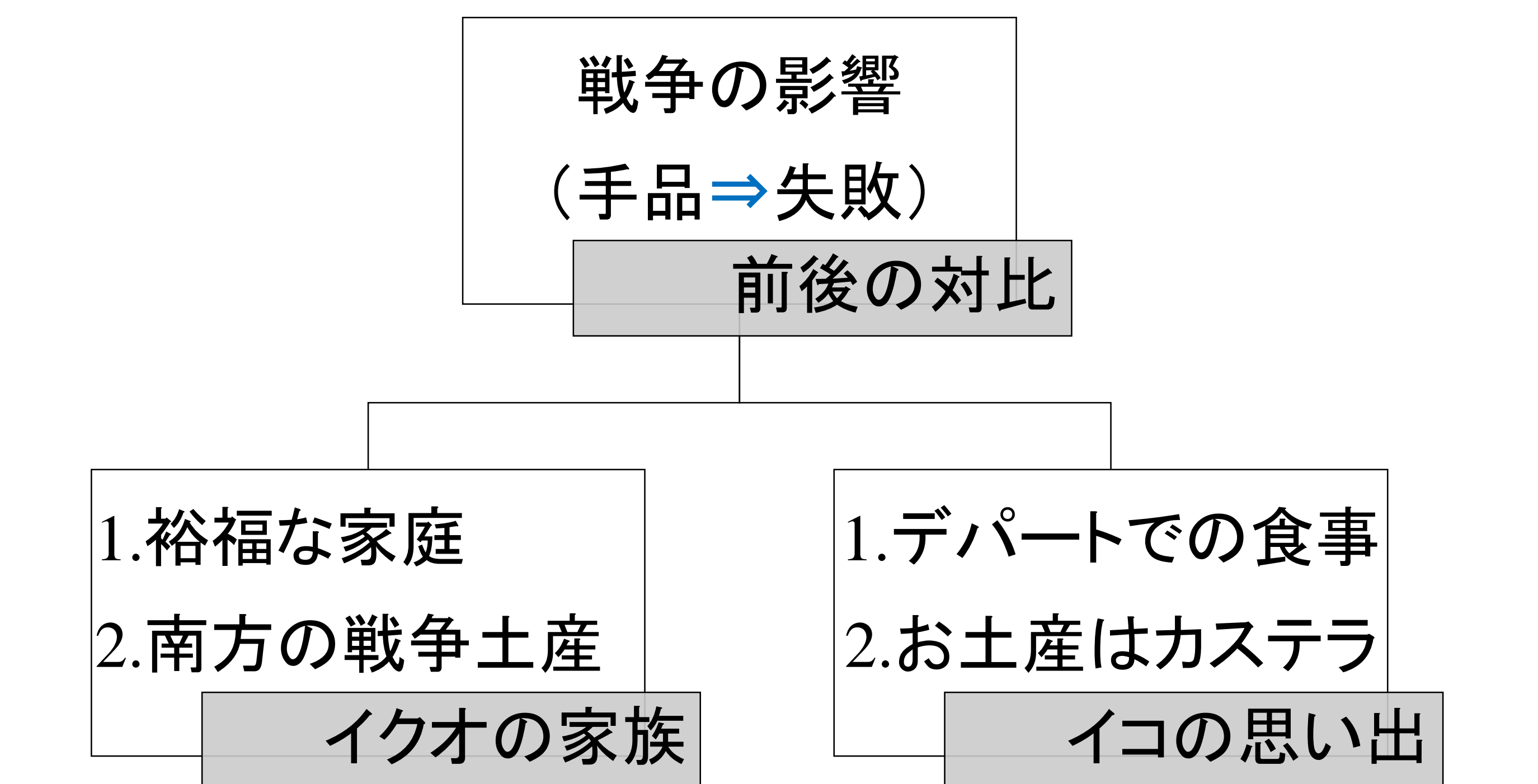
- 主人公イコ(10歳の女の子)をめぐる戦時下の新しい環境と人間関係は何を表しているのか。



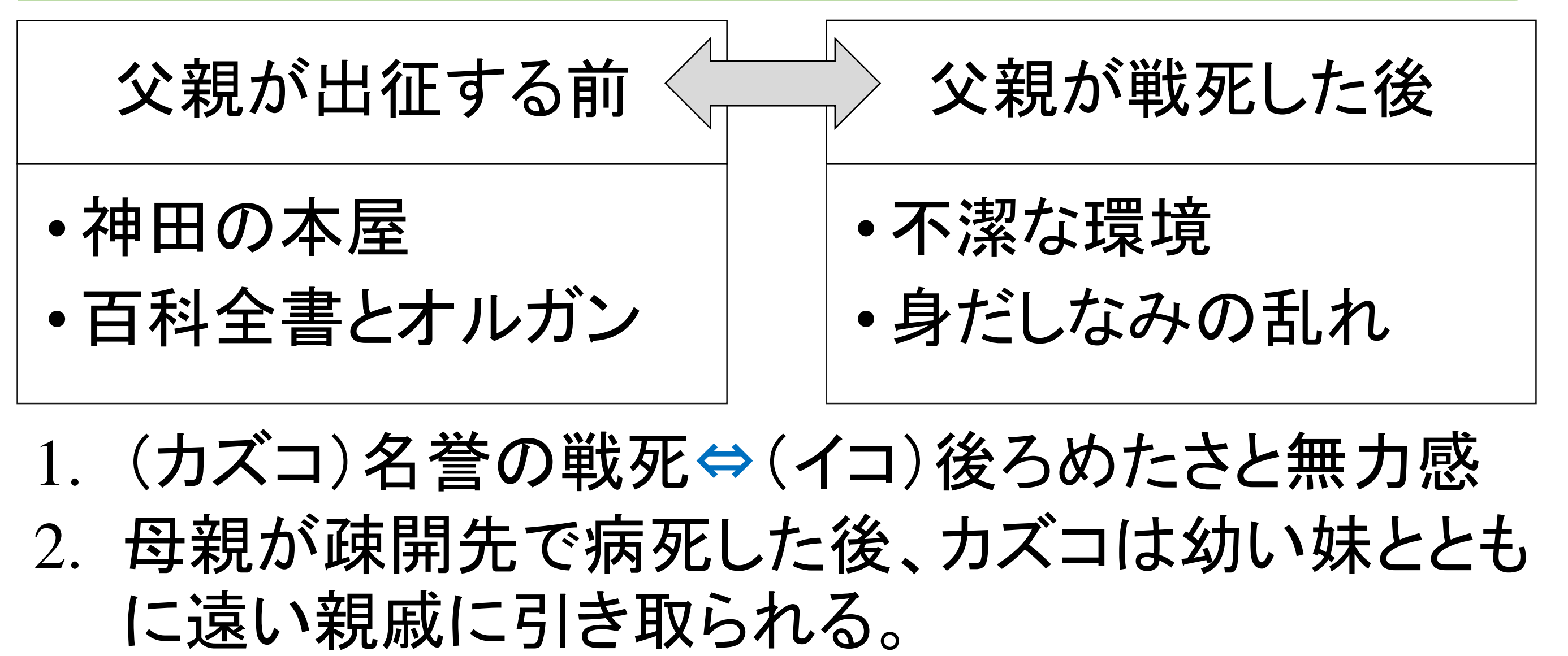
戦時下の父親たち: 徴用・従軍・戦死

- 徴用・従軍・戦死・脱走など戦争に関わる成人男性のキャラクターがかなりそろっている。
- 子供の視点⇒徴用・従軍と戦死の父親たち⇒子供に与える影響

立派な軍人: イコオの父親



戦死者とその遺族: カズコの場合



結論

- 新しい環境と関係(父親の不在)⇒子供の自立
- 戦時下の男性⇒戦争や子供との関わりで描かれ、女性に比べてラインアップがそろっている。
- ママ母の立場⇒父親(男性)に左右されている。

参考文献

- 角野栄子「角野栄子さんインタビュー」『ブックショート』2015年7月13日、SHORTSHORTS (<https://bookshorts.jp/kadonoeiko/> 2021年7月11日アクセス)
- 角野栄子・戸谷真美「角野栄子さん「トンネルの森1945」私の戦争体験、少女の視点で」『産経新聞』2015年7月15日
- 川端有子『児童文学の教科書』玉川大学出版部、2013年
- 佐藤宗子「児童文学の「戦後」と「現代」」『日本文学』日本文学協会、59巻11号、2010年11月